DOM

Eld: Kou MUKAI

2-12-2, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPANIO

20, Marto. '80 Nro 236

▼大迫不敬（オオサカフケイ）の私服さんたちは・三月一日伊勢・二日奈良そして京都を〈浩宮〉が新幹線で立去ると共に・三月三日午后一時すぎ・ぼくの身辺から忽然と消えた。13日間（20日から3日まで）夜もひるも彼らの車が駐まっていた横丁の電柱のかげが・急にガランと空いて・ほくの二メートル巾ほどの空地が広くみえる・カラになった一升瓶が一本（おそらく深夜の寒さしのぎにのんだのだろう）、壁ぎわにポツンと残っているだけ。

▼それにしても、延にしたら60人あまり・入れかわり立ちかわりで三～四組20人？ほどの人間が夜ひる、たとえば便所ひとつにしてもどうしたんやろか。さつと、そう遠くないところにアジトをつくつたのだろうが、エライコツチャ。

▼『あさひまち反原発新聞』に、この張込みのことをかいて、周辺500戸位の郵便うけに入れた。それからぼくがオフロへいくと・ナント、それが警察の手配書などとならんで壁に貼ってあつた。もう十日もたつのに・まだ貼られたまま。（14日）

私・そして〈運動〉・II

八時間小集会のこと。

1

この8時間小集会は、はじめふう子さんが発起した。ウリニュースレター24号に〈自由連合とは何か〉という、やや長い文章をぼくと合作したので、それをテーマに話し合いをしたい、ということだつた。（というより、ふう子さんの意図したものは、この文章をかくことによつて・どれほど根深く自分が「統一志向」をもち、抜きがたく「中央集権的発想」にとらわれているかが判つた―そのおどろきと発見を・みんなに判つてもらいたい・伝えたい、ということだつたろう。）

ぼくは・すぐその試みに賛成したのだが、いままでふう子さんですら明らかなものではなかつた〈自由連合〉の・内容と意味が・とつぜん話合いのテーマとなつたとしても・それは一方が説明し・話すというだけで・話合いにはならない・〈自由連合とは何か〉を自分の問題としてたえ・さぐるのではなく・みんなまたぶ聞くだけになつてしまう

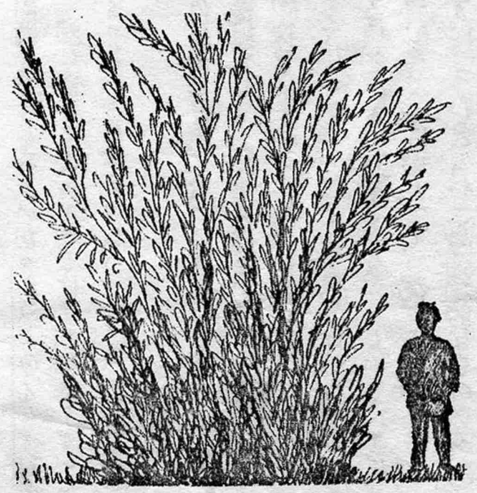
8時間―という時間は・時間に制約されないでじつくりとなつとくいくまで話合う―ということで設定したのだが・その意味もなくなつてしまうことになる。

で当日になつて「自由連合」がまだみんなの共通の問題意識に昇らない状況で・その話い合いをする前提というか前段を明らかにする―ということのために・まず参加者ひとりひとり・それぞれがもつている問題に即して話す・ということにした。そして・〈私・そして運動〉というテーマで・何でも自由に・まず一人が十分ずつ（質疑を入れると二十分ぐらい）順番にしやべるということになつた。

2

ちよつと脱線するが、こういうやり方は・たとえばぼくがイオム通信などで文章をかきすすめるやり方に似ている・ふと・意識にのぼつた問題を・うん・これをかこうと思つたとき・それはぼくにとつて・すこぶるぼくぜんと・もやもやしたけむりか雲のようなもので・まだ殆ど足がなかたちはない。だから・どこから・何から取付いて書き出すか・そのとつかかりをさがしあぐねて苦労する・

さがしあぐねて―というとき・ぼくの場合・取つつきをさがす―そのさがすやり方をさがすと云うほうが正確である。（つまり、8時間小集会で〈自由連合〉をしらべていく方法としてへ私そして運動〉が出てきたわけである）



ところで、方法をさがすというとき、ぼくの場合、当初の意識にのぼつた問題のことはしばしば閑却されて、その方法として出てきたもの、内容や問題に力点がはいつてしまう。もちろん、ぼんやりとした感じでの結びつきはあるのだが、果して最後にそこへ結論的にすんでいくのかどうか、ほとんど不確定的で、判らない・眼前の問題を処理？解明するのに夢中で、意図的に結論をそこへつなごうという操作も忘れてしまう。

だから・時には意外なことに展開することもある・その展開がまたおもしろく・ぼくにとつても新しい発見になるわけで―実際は小さい発見がちよいちよいでてきて・それがイオムをかくときの・まあ未知のぼくに・ぼく自身があうといつたハプニング的たのしみ―でもある。

3

さて・8時間小集会は、一回きりではとても恰好がつかなくて・第一回12月23日・第二回1月1日・第三回3月16日とつづいたのだが・自分で買つてでたぼくの司会進行が・ちようどイオムの文章をかくような・でたとこ勝負だつたので・すこぶるまとまりがなく・のろのろと進むことになつた。

進むというより・同じことを前後左右上下から・みんなで考える―ということだつたともいつてよい。

だからいま迄のところで　本来の〈自由連合〉については全くどこへいつたのやらという形で・三回で計二四時間という時間は・あつというまに過ぎてしまつたという感じ。

まだその内容を云々するところまでになつていないのだがそれでも予期しないような「新しい発見」がちよいちよいで

てきて、時間と回数はムダでなかった、と云うことはできる。第四回目をいつやるか、やるかやらないか、きまっていないので、一応、いままでの経過をメモ代りに、自分用としておいておくことにする。

4 みんなギャップを感じている

第一回目は、みんな順番に、まず10分ぐらいの持時間で、「私そして運動について」ふと思いうかんだことをしゃべる、ということからはじまった。そのかぎりではナ数くがしゃべった内容は、もっぱら自分に即することで、他との関連はなくばらばらのまま放り出されたという感があった。ともかくそのなかのいくつかを（ふうさんが第三回までに一人400～600字ぐらいにまとめたので、それをさらに要約して）紹介する。

▼「反公害住民ひろば」は、住民の交流団結をかかげてやってきた。そして三里塚・反原発・水俣・大阪新空港など、いろんなところへでかけていく。…しかし交流団結とは、一体どういうことなんだろう。つながる、結びことの意味はどこにあるか・つながって、その先に何が、どうなるのだろう。

たとえば、10.26反原子力月間のデモでは二千五百人も集った。が、これもたゞ集っただけとも云えるのではないか。集った労働者、市民・学生相互の関係に何かが生れたか。市民同志のなかでの交流がひろがったか。そのデモは何に勝利し、何を阻止するものとして、何をみんなにもたらし、かちとるものであったか。つながることの先がみえてこない。

自分個人についてこうなら、運動に加わることで、いろんな問いを知り、問題を知り、いろんなくたちと出会うことで、自分自身が変るということがあった。そして自分が変ることで、また運動が変るという可能性が出てくるだろうことも予感できる。そういうかたちの中からの「つながり」ということは、実感できるのだが……

補注（第三回目）「つながる」ことの意味は、自分の自立化をいろんな妨害から「守る」ということにあるのではないか。勝つために闘うのではなく、自分を守るために、つながり闘うのではないか。

（Sさん）

▼獄中はある意味ですばらしかった。自分のカラが一つ一つ破られるその解放感・それまでの私は「ひろば」に出入して、出てくる問題のあれもこれも重要ということで助っくとしてのひろばの、そのまた助っくとして動きまわっていたが、一方では学校を卒業したら公務員か教師になり、市民としての安定した立場をもつくって、その上で何やかややれるようなことをやろう、と思っていた。それが10ヶ月の獄中生活は、そういう市民主義の呪縛から解放した。獄中では、すべてをなげうって闘っているたくさんの仲間を知った。獄中でサトリをひらいて、さて下界へ戻ってきたら、トタンに自分のおもっていることと、現実に自分が立っているところ＝市民社会＝とのギャップが生じて当惑している。

自分はやっぱし親の家にいて、小遣銭かせぎに塾の教師をして、そして裁判のあれこれについては、市民生活を送っているひろばの仲間に、多大に支えられ援助されている問題。

権力のすがたがはっきりみえる獄中とちがって、敵がはっきりとみえてこない都市の中での生活の日常。ひろばの闘いの問いかの問題。そのギャップ。市民運動の柔軟性とセクトや過激派といわれるものの中の直贈な闘争性とのギャップ。

自分の立場をどこにおき、どう確立するか。市民運動をどうたえていくか、自分自身はっきりわからない。

このようなギャップをこしよに考えるという仲間関係もつくれないーというのが、今わたしの「なやみ」だ。（Oさん）

▼ぼくは勤めの関係で、集会などへあまり出かけていくことができない。参加しても8時すぎになるから結果として、どんどんやってるくから、いつも提起をうける側になってしまう。そしていまや、受け手という関係は固定化してしまったように思う。

たとえばひろばの中で、「こんど原関連でこういうことがきまったから、ひろばでもやろう」なんて云われても、討議以前にきめられている感じだし、限られた人間が原関連の集りへひろばと名乗って、その限られたくたちだけできめたことを、ひろばとしてもやろうと提起されると、事後承諾的に納得させられるようでイヤだ。

ぼくは運動だけが人生だとは思わないし、他にもっと自分を生かす道はあると思ってるのだが、もっと、みんなとこしよにやっていける運動というのはないのか。いつも提起者が限られるという問題をどうしたよいか。もっとみんなで話合う必要がある。話し合って決めるのではなく、ひろばとか原関連の名でやる、というのはおかしい。（Fさん）

▼このまえの原関連世話人会でのこと。不払い連からの提起として、関電の株主にならへんか。すでに10株買ってある。それを預けるので、何株でも買ってほしいのやけど…ともちかけた。ところが、そらおもしろいとか、いやお金がないーというのではなく、思いもかけぬ拒否反応に出会って、びっくりしてる。

わたしの云い方に、うむを云わさぬ強圧的なものがあってその上、とう突だったかもしれない。だけど、その拒否の仕方が「株を使って一体どんな闘い方使い方があるかを、まずみんなで検討し、勉強してから、持ち出すべきだ。そういう提起の仕方は、順序が逆ではないか」というものだった。

そこでは、みんなという大義名分で、組織が、個人の発意や、やる気をおしとどめる役割として働いている。自分がナットクしなければ「株主になりたくない」ですむのに、みんなでとか全体でまずーということで反対理由を、順序とか手続きにすりかえてる。それが問題やとおもう。

どうしたら自分のいいたいことが相手に判ってもらえるかむずかしい。

（Tさん）

3月18日記　以下次号へつづく

イヤム通信またはWRIニュースレター入手希望の方は、封筒に宛名をかき50円切手を貼ったへ送付用封筒＞6～10枚（半年分位）を発行所宛、お送り下さい。

向井孝